「私は　ここに　いる～障害学～」を見て

医療や福祉、教育の視点で語られてきた障害に関する課題を、“社会”という視点からとらえ直していく新しい学問「障害学」に取り組む、目が見えず、耳が聞こえない東京大学教授・福島智先生の「私は　ここに　いる～障害学・福島智～」のインタビュー番組を見た。

氏は、「障害」という概念は近代国家が産業革命により均質な労働力を必要とする選別から生まれてきたのでないかと云い、故に現代社会においても「障害とは何か、誰がどこで決めてるのか」と問いかける。

そう云えば、近代国家が軍隊を持ちあるレベルの能力ある兵士を選別するために知能検査が必要とされ発展してきたもの、と大学時代の講義で聞いたことがある。

これらを考え合わせると、障害とは、その時代、その社会が決めているのでないかとも云える。

氏は、目が見えなくなり、耳が聞こえなくなり言葉での人と係わり合う（コミュニケーション）手段がなくなる孤独、絶望の中で、母親の工夫による指点字に出会ってコミュニケーション手段を獲得することで、生きる意味を感じることが出来、現在に至ってると云う。

やはり、自身の存在感（アイデンティティ）は人と係わり合う中でこそ認識されるもので、「生きる喜びとは、人と係わり合う喜び」ということのように思う。

また、フランクル（「夜と霧」の著者）の「絶望＝苦悩－意味」を引用しつつ、苦悩の中でも自らが生きる「意味を見いだせればそれは絶望ではない」と、氏は自らの体験も重ねながらも説いているように思った。

これも、緩和ケア関係で云われている「受容能力：自分に不都合なことが起きた時に、その不都合さの中でも人間として生きているという証を見ることができる能力。」と、また、WHO の健康の定義「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない。」と通じるところがあるなあと思った。

いわゆる障害や病気が「ある、なし」ではなく、日常生活を過ごす上での身体活動、精神活動のどこかに不自由さがあるという意味では誰もがみんな「障害状況」を抱えており、だからこそ、絶望に陥らないように人との係わりを求め続け、その中で「生きるとはどういうことか」を自らに問い続けているのが人間の普遍的・根源的な本質かなと、番組を見て改めて思った。

阿部幸泰　　（2009 年 6 月 11 日　記）